

《センターより》

平成19年度動物慰霊式

科学分析支援センター 畠山 晋

平成19年度埼玉大学実験動物慰霊式が10月9日(火)14時00分から理学部2号館第一会議室において執り行われました。教育および研究の目的で実験動物を使用している方々ばかりでなく、動物の御霊に感謝し安らかな眠りを祈りたいという方々、合わせて84名の教職員および学生の参加者がありました。

科学分析支援センターの畠山晋講師の開式のことばによって式が開かれ、町田武生・理学部長のあいさつがありました。実験動物を扱う者の責務として、適正な動物実験を行なうように努めるだけでなく、常に動物に対する愛護と感謝の気持ちを持っていただきたいと述べ、さらに、法律の改正や本学の規定改正に伴い、ますますその気持ちを強く持つて欲しいという希望を伝え、あいさつを終えました。これに続いて動物飼育室の利用者を代表して小林哲也准教授(理工学研究科)より慰霊のことばが捧げられました。教育・研究の名のもとに犠牲になられた動物の御霊への敬意と安らかな眠りを祈り、動物の御霊に報いるべく、教育・研究になお一層の努力を重ねる所存が述べられました。次に参加者全員によって花が捧げられ、黙祷することによって、参席の方々が実験動物の御霊に対する感謝の気持ちを捧げ安らかな眠りを祈りました。最後に科学分析支援センター長・井上金治教授のことばによって式が閉じられました。とくに、普段実験動物を扱っている方々は、動物の苦痛と犠牲を出来る限り少なくし、かつ最大限の成果を上げられるように工夫した実験を行わねばならないという思いを新たにしようです。

「動物の愛護及び管理に関する法律」では、国民の間に広く動物の愛護と適正な飼養についての理解と関心を深めるため、9月20日から26日を動物愛護週間と定めています。埼玉大学においてもこの主旨を理解し、実験に供される動物に対して感謝の気持ちを常に忘れることなく、教育と研究において適正にかつ最大限の効果によって動物実験が行われなければなりません。そして生命の尊厳について深い思慮をもった人材が慰霊の気持ちを通じて育まれることを祈るばかりです。

